

「追想紀言」 学習の記録 令和3年1月

⑨追想、先妣文政辛巳

追想、先妣文政辛巳、罹病、荏苒度日、踰年而少愈、既而又大發不能飲藥、乃以烏喙陶器、將注藥乎其口、妣視其器而屏之、蓋以垂死病人所常用也、嗚呼此果何心哉、不堪苦酸、

読み

追想、先妣文政辛巳、病に罹り、荏苒日を度る。年を踰へて少愈、既而また大發し藥を飲む能はず。乃ち烏喙の陶器を以て將に藥を其の口に注がんとす。先妣は其の器を視て之を屏ける。蓋し死に垂とする病人が常用するところを以てなり。嗚呼、これ果たして何の心や。苦酸に堪へず。

訳

想い出。母は文政四（一八二二）年病に罹り、じわじわと日が過ぎていった。その年を越えると少しよくなった。しかし、またひどくなり、藥を飲むこともできなくなった。そこで、烏のクチバシのような陶器でその口に注ぐとした。母はその器を見て、これを退けた。それはまさに死なんとする病人に用いるものであったからだろう。ああ、これは果たしてどんな心持ちであったのだろう。つらくて耐えられない想いだ。

※注 草庵の母は、文政五（一八二二）年正月廿一日に亡くなった。

その時、草庵は数えで九才であつた

言葉

文政辛巳 文政4年 一八二二（草庵数えで九才・文政五年正月廿一日母死去）

辛巳 二カノトミ しんし

荏苒 二ジンセン じわじわと歲月が次第に過ぎ去っていくさま

罹 二リ カかる

踰 二ユ こえる

愈 二ユ イエる

烏喙 二ウカイ カラスの様に長いクチバシ

屏 二ヘイ シケゾケる

哉 二カ ヤ カナ

垂死 二スイシ 今にも死にかかっている

哉 二ヤ 何（なん）ぞ などとよく用いられる

酸 二サン つらい 苦しい